

薬学部・薬科大学 訪問

Report 14

昭和薬科大学医療薬学教育研究センター 医薬情報評価教育 串田研究室

話し手：串田 一樹 先生

Kazuki Kushida

昭和初期に設立された昭和薬科大学。女性のための薬学専門学校としてスタートし、その後男女共学となり、80余年の歴史を経るなかで多くの卒業生が巣立ってきました。時代と共に医療や医薬品は進歩し、薬剤師の役割も薬学教育も変わりつつあります。今回は、在宅医療の分野において学外でも活躍されている、医薬情報評価教育 串田研究室の串田一樹先生にお話を伺いました。



串田先生(前列左から3人目)と研究室の皆さん



1945年の大空襲で焼失せずに1本だけ残った同校のシンボル・黄楊の木

学校メモ

- ◇昭和5(1930)年 東京・目黒に昭和女子薬学専門学校設立
- ◇昭和20(1945)年 世田谷に移転
- ◇昭和24(1949)年 昭和女子薬科大学として発足
- ◇昭和25(1950)年 男女共学の昭和薬科大学に変更
- ◇平成2(1990)年 町田キャンパスに移転
- ◇平成18(2006)年 6年制教育の開始
- ◇1学年の定員240名。現在の在校生は学部1,522名、大学院薬科学専攻修士課程2名・薬学専攻博士課程6名(内2012年4月の入学人数は学部265名、大学院薬科学専攻修士課程0名・薬学専攻博士課程4名)

創立時に奮闘した女子学生達

昭和薬科大学の前身は昭和女子薬学専門学校で、オーナーのいない私学として1930年に設立されました。当時は、女子学生も教員と一緒に運営を助けたというエピソードが伝わっており、学校を共に創るという熱い想いがひしひしと感じられます。そういった想いが周囲の人々も動かして本学が築かれました。

最初の校舎は東京・目黒にありましたが、太平洋戦争で被災し1945年に世田谷の弦巻に移転。さらに平成になって自然が豊かで広い町田キャンパスに移転し、6年制に対応した教育環境が整備されました。本学の歴史の一端を刻むと共に、卒業生へのメッセージとして、町田キャンパスの模擬薬局を『めぐろ薬局』『つるまき薬局』と命名し、大切な名前を受け継いでいます。

在宅医療における薬局の機能と支援策を研究

今の学生達は、薬剤師が医療人の一員であることが頭ではわかっているのですが、まだ実感に至っていません。私が担当するヒューマンズ教育は1～4年生の各学年で学ぶことになっており、成長に合わせた内容を取り入れています。介護も体験するなど、薬剤師とは何のために存在するのか、薬物治療に責任を果たすために何をすべきなのか、などを考える機会にしてもらっています。5年生の実習を終えると「目に見えて変わったな」と思うほど、学生は成長しますので、やはり実習や人との出会いによって学ぶことは多くあります。

私自身の研究では在宅医療をテーマにしていますので、興味を持った学生達が研究室に集まって来ます。地域医療で先駆的な薬局についての調査や、在宅医療の立ち上げの支援、また在宅医療や離島医療などの現場を学生に体験してもらうことにも取り組んでいます。

現場の薬剤師と一緒に築く地域医療

2012年は新生在宅元年といわれ、在宅医療が重点課題とされ、診療報酬での評価が手厚くされました。医薬分業が本格的に進んだ30余年、薬剤師が薬物療法に関わってきたことが認められ、今、チーム医療や在宅医療への参加が求められています。それは6年制になったからではなく、先輩達のこれまでの努力のお陰です。保険点数は付かなくても患者さんのために実践してきたことで、「薬剤師さんお願いね」と他の職種から頼られるようになりました。また、これからはプライマリケアやセルフメディケーションで地域の薬局・販売店が力を発揮することになります。卒業生の方々はやってきたことに自信を持ち、「若者よ、かかってこい」というくらいの気持ちで学生達を受け入れ、ご指導いただきたいですね。

▶▶ 次回は福岡大学の予定です。